

情報処理教育センターでの2年間

江口, 三代一
久留米工業大学 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/6770644>

出版情報 : 情報処理教育広報. 10 (1), pp.50-53, 1987-07. Educational Center For Information Processing, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



情報処理教育センターでの 2 年間

江口三代一*

昭和 60 年 4 月に情報処理教育センターの助手になって、62 年 3 月にやめるまでの 2 年間の体験や感想をセンターの仕事の紹介もかねて、年を追って順に書いてみます。

助手になる前は工学部電気工学科の大学院生でした。初めてした仕事はセンター 4 階講義室のワイヤレスマイクの件でした。それまではタイピン型ワイヤマイクが備え付けられていたのですが、アンプにはワイヤレスマイクの音量調整つまみが付いているのにもかかわらず、そのワイヤレスマイクがどこにも見当たらなかったのです。結局教卓の下の開き扉の中にあったのですが、そのカギを探すのもしばらくかかりました。情報処理教育センターの建物ができてからすでに 5 年過ぎており誰も知らなかったのです。

4、5 月ごろはセンターの事情もよくわからず、また、計算機を入れ替えてまる 2 年経過したころでシステムの変更もさほどなく、私に回って来る仕事はあまりありませんでした。大学院生のときは日本語ワープロに O A S Y S を使っていましたが、情報処理教育センターには富士通の大型機のワープロ J E F とシャープの「書院」しかなく、両者ともとても使いづらく感じました。ちょうど文部省に提出するためのシステム構成図が必要になり、いろいろ考えた結果、「書院」のグラフィック機能を使って描くことにしました。これは機能的には何でもできるのですが、操作パネルが複雑で、マニュアルのできの悪さとキーの押しにくさに対してぶつぶつ言いながら 2 日ぐらいで作りました。しかしこれを作成したおかげで、その後の機種更新などでは少しの訂正で済みました。同じ事を 2 回までしかししないなら、その場しのぎでよいと思うのですが、3 回以上することが予想される場合は計算機を使った方がよいと自分で判断基準を作っています。

昭和 60 年の 6 月ごろ自分の論文の都合もあってどのワープロを使おうか思案していたころ、J E F の拡張である O D M が試験的に入ってきました。これは数式が文中や行間にかけるので手に入るワープロの中では最高の機能をもっていました。ところが、マニュアルがあるだけで、しかもそのマニュアルにも数式記述法については何も書いてなく、いろいろ試して使って行きました。数式記述を中

* 久留米工業大学助教授（昭和 60 年 4 月～昭和 62 年 3 月まで情報処理教育センター助手）

心にODMの使用法を大型計算機センターの広報に書くことになり細かいところまで調べました。解説を書くことはこれが初めてだったのでいい経験になりました。センターには逸早くいろいろなものが入って来ますが、これらを一般利用者に気持ちよく使ってもらうことは結構大変であることが実感できました。

昭和60年の7月に情報処理教育センターでTSSの初心者講習会を開きました。5日間、午前と午後に2時間ずつのスケジュールだったので、最後のころは私と次長の藤村助教授は夏ばてぎみで、来年はもう止めようと言っていました。この講習会は時間も十分かけ演習も丁寧だったので評判はよかったようです。

10月から2月までは学位論文にかかりきりでした。ちょうどそのころ次の機種を選定することになりました。3年前（昭和58年）にM360を入れたときは充分新しかったのですが、その当時すでにあった日本語機能は、端末が高価だったため学生には公開されていませんでした。計算するだけの計算機は学生にとって面白くないことは明らかです。大型機をパソコンと比較して使う学生には、大型機は自由に絵もかけなくて使い勝手が悪い機械という印象を持ったに違いありません。パソコンでもFORTRANやPascalが走るのですから情報処理教育に大型計算機が果たして必要かという考えもありますが、今回も大型機でサービスを行うということになりました。

話は変わりますが、昭和61年4月に情報処理教育センター事務室の模様替えがありました。それまでは中央計数施設の事務が同居していたのですが、分離して情報処理教育センターだけの事務室になりました。さらに6階にあった受付を5階の事務室と一緒にし、名称も「受付・事務室」と変わりました。センターの職員が5階に集まったことで顔を合わせる機会も増え、お茶の時間を兼ねた打ち合わせが非常にやりやすくなりました。不思議なもので人間は横方向には割と移動しますが縦方向にはなかなか移動しないようです。例えばワープロやマイコンは同じフロアですぐそばにないと、なかなか億劫がって使わないことと同じだと思います。計算機をもっと使ってもらうためには、端末を分散して身近なところへ置く必要があるようです。

話をもとに戻しまして、10月からの全面入れ替えの準備として、昭和61年8月に教官用の端末をF6683Aという日本語、図形、イメージ処理ができるものと入れ替え、オフィスプリンタを1

台入れました。この時点で情報処理教育センターからカードリーダーがなくなりました。昭和58年に機種を入れ替える時にはカードリーダーとカードパンチを残してくれという要望があったそうですが、結局カードパンチは入れずに、カードリーダーを学生の課題登録用マークカードを読み込ませるためだけに残したそうです。この結果、結構高いカードリーダーのレンタル料を他のところに使うことができるようになり、またI/O室もそのスペースが空いたためすっきりしました。その代わりティッシュペーパーの箱を3周りぐらい大きくしたような、パソコンにRS-232Cでつながる、アンリツ製のカードリーダーを購入することになりました。

6月ごろから後期の授業開始に間に合うように、新しいマークカードの設計・発注を行い、課題登録プログラムを作成しました。これは、カードを読み込んで課題番号、パスワードのチェック、氏名のローマ字カナ変換を行いフルスクリーン形式で修正後、自動的にホストへファイル転送して課題登録を行ってくれるというものです。情報処理教育センターにいた2年間にいろいろなソフトウェアを作りましたが、これは自分で気に入っているものの1つです。

8月に端末が入って来てからは、今までできなかったことができる環境になったものですから、やらなければならないことが次から次へと出てきました。九州大学には大型計算機センターがあるおかげで富士通のSEやCEの人が常駐しており、情報処理教育センターの方も何かとお世話になっていました。端末は発表されたばかりの最新のものだったので、OSも含めて、ソフトウェアを最新のレベルに上げてもらいました。学生から見るとグラフィックと日本語が使えるようになるので、プログラム相談の学生に新しい機能をいろいろ紹介しました。また、日本語化できるメッセージはほとんど日本語に置き換えました。図形処理もGSP、GRACE IVやGRAPHMANを公開しましたので、徐々に利用者が増えて行きうれしく思いました。機種の入れ替えを情報処理教育センターで経験できたことは大変良い経験だったと思います。

端末とソフトウェアが新しいものになったため、今までのセンター運用プログラムではいろいろ不都合なことがおこりはじめました。そこで、本年4月から今までの管理プログラムをやめてメーカー標準製品を使うことになり、方針や仕様が数回の富士通とセンターとの会議で決まりました。私は課題登録システムをつくることになり、情報処理教育センターをやめる3月末ごろにやっと完成しまし

た。これも、非常にいい経験になったと思います。

情報処理教育センターの職員は併任のセンター長、専任4人（次長、助手、事務官、技官）、非常勤1人です。たったこれだけでセンターを管理維持していくのはかなり大変です。情報処理教育センターは学部とは独立した1部局ですので、文部省やその他から要求される書類（概算要求、各種調査など）が多く回って来ます。しかもセンターの方針や計算機の知識を必要とするものが多いため、勢い次長の仕事が増えることになります。計算機というものは何もしないで運用していくと少しずつ腐って来るそうです。例えばファイルのゴミがたまったり、無駄な空領域ができてアクセス速度が低下したり、ソフトのレベルアップがないので不便なまま使わなければならないことになります。幸い情報処理教育センターは次長の藤村先生が計算機の専門家で計算機のパワーを十分発揮できるようにチューニングされていますので、同じレベルでの計算機の中では応答がよいと感じました。

このようにシステムの更新を常に行っているため、学生用の利用の手引もその度に改定しなければなりません。私が在職中だけでも昭和60年7月、61年10月、62年4月と改定しています。センターのような共同利用施設は利用者から見てセンター職員の存在を意識させないようなサービスが望ましいのですが、システムの管理、維持、更新を常に行ってこそ可能になると思います。

情報処理教育センターの2年間は、普通の講座の助手をやっていたら到底経験できないことを経験させていただき多にプラスになったと思います。どの分野でも同じだと思うのですが、特に重要だと思うことは人間関係です。1人で把握できることは限度がありますので、システムが大きく複雑になればなるほど、「知っている人を知っている」ことが仕事をする上で大切になって来ます。

藤村次長をはじめ、情報処理教育センターの職員の皆さん、富士通のSE、CEの方々、大型計算機センターの職員の皆さんと知り合うことができて幸福だったと思います。皆さん、有難うございました。